

保育者養成のための造形関連科目における遠隔授業の実践報告

A Report on the Practice of Distance Learning for Preschool Teacher Training
in Modeling Subjects Relating to Creative Play

石川 秀香

Hideka Ishikawa

Keywords : 遠隔授業、実材、造形制作、保育者養成、教室

1. はじめに

新型コロナウイルスは、人々の生活に大きな影響を与えただけでなく、学校教育のあり方さえも変えてしまった。多くの大学では校舎や教室というそれまで当たり前で使用していた学びの空間における一斉型対面授業が困難な状況である。授業者にとっては授業の形態が、学ぶ側にとっては学修の方法が様変わりをし、授業観や学びのあり方そのものが問われるようになった。

造形関連科目の授業担当者は、一斉型の対面授業において材料や用具という実材を扱い、「人とモノ」さらには「人と人」が有機的に関わることによって、よりよい学びへとつながるための授業運営を日々模索し実践してきた。それは教室や実習室という物理的空間が核となって展開されてきたのである。しかし、校舎の使用が困難になるという状況に直面し、造形制作を行う科目は、その授業のあり方を再考しなければならなくなった。

今回の報告対象である「図工（幼）」は、受講生に制作体験を課して多様な角度から美術・造形的な活動の魅力を実感してもらうと同時に、その教育的な意義を理解して保育活動に生かすことのできるような資質と能力を培うことを主なねらいとしている。このような実技を伴う授業の場合には、材料や用具の準備とそれにより展開される活動のための空間をいかに確保し、運用していくかが授業担当者に課せられることになる。当初は、対面による教室使用を想定して授業の準備をしていたが、それが叶わず遠隔での授業開始となった。

材料・用具・活動の空間という三つの要素は、制作活動をしていく上で常に一体的にとらえられてきた。したがって、制作作業を伴う授業の運営を考えていくには、この三つの要素と制作者（授業においては学生）との関わりを想定して、その準備を行わなければならない。しかし、コロナ禍の影響により、これらが乖離した状況での授業運営を迫られることになったのである。前述のとおり、「図工（幼）」は保育者養成のための美術・造形的分野を担う科目であり、学修の成果もこの三つの要素に負うところが大きい。したがって、これらに関係する準備から授業展開という一貫した流れを報告することによって、造形制作を伴う授業の今後を考えていく一助になればと考えている。

2. 報告対象授業の概要について

対象とする授業は、令和2年度の秋学期に開講された「図工（幼）」である。2020年10月1日から2021年の1月21日までの期間中、15回の授業回数を通して10題材を実施した。授業時間は1時限100分で週1回開

講し、単位認定が許可されれば2単位が取得できる。この科目は、教育学部乳幼児発達学科に所属する1年生を対象としており、受講する学生のほとんどが幼稚園教諭もしくは保育関係の職を志望している。そのために、授業では乳幼児期における美術・造形的活動の意義と子どもの育ちに対する関わり方を学ぶための教材研究を目的とした制作実技を課している。

科目担当者としては、一般的な保育の現場での活動を想定して、特殊な造形材料を用いることを極力控えて、市場に広く流通していて比較的入手がしやすく、かつ安価な物件を選定するように心掛けてはいるが、日常生活での使用頻度が低く、しかもその授業題材でしか用いることがないものは、やはり授業担当者が用意しておく必要がある。しかもこのような状況下において、受講生にこれらを購入するための外出を強いる訳にはいかず、また地方で遠隔授業を受ける学生がいるために、事務部に相談して学生の現居住地に必要最低限の基本的な材料と用具類を送付するよう配慮した。なお、今学期の受講者は1年1組から6組に在籍する学生41名（男性2名、女性39名）であり、制作実技を伴う授業としては人数的にやや多目である。

3. 遠隔授業の実施形態

遠隔授業の形態は、大別するとオンデマンド型と呼ばれる教材提供型の授業と、ライブ配信により行われる同時双方向型の授業に分類される。教材提供型は、授業者が講義の内容や使用する資料データなどの教材をインターネット上で配信し、受講者側はそれを受信して学修するというものである。受講者にとっては、場所や時間からの制約を受けることが少なくなり、また受信環境に対する負担も軽減されるが、学修の状況や成果についてその都度報告をする必要がある。同時双方向型は、授業者が研究室などから映像や音声をインターネット上で配信し、受講者がそれを自宅で受信して授業を成立させる方法である。会議サービスシステムを用いて実施するため、同期による授業運営が可能であり、授業時間中に受講者と授業者の応答ができるなど、対面に近い授業を行うことができるが、受講者側の通信環境がそれに応じられるかという問題もある。

「図工（幼）」のように、制作作業を伴う授業を遠隔で実施する場合に問題となるのが、受講生の学修環境である。学生の多くは、自宅やアパートにおいて受講することが予想され、学修環境は個人によってかなりの差異を生じることが想定された。授業担当者から材料や用具類を送付するとしても、それは必要最低限のものであり、授業時の制作活動にそれらを補う物品は、各自が創意工夫をして準備し授業に臨まなければならない。教室や実習室における対面方式での一斉授業は、学修環境を均等にすることができるため、授業時間を同期にすることにより高い学修成果を得ることができる。しかし、オンラインによる同時双方向型を選択した場合は、学修環境の差異をどのようにしていくかが課題となる。教育活動において時間と場所を共有するということは、時間と場所から拘束を受けるということでもあり、今回はそれによる影響を考慮する必要があった。

一斉型の対面授業では、制作作業が開始されればそこからは受講者本人と材料と用具の直接的な対話とも言えるべき活動が中心となり、それを通して学び得る事柄が学修の主な成果となる。教室という物理的な空間はそれを支え、授業者は共有する時間と空間を有効に機能させるために、授業全体の進行を考えて受講者に指示を与え、また個別の対応をすることになる。しかし、今回のように場所を共有せず異なる学修環境において制作実技を伴う授業を行う場合には、むしろ時間的拘束を解いて受講生に学びを委ねた方が良いように思えた。もともと、造形制作には不確実な要素が内在し、それをいかに解決するかに教育的意義を見出すことができる。問題の発見はもとより、自らの技量と知識の見直しや新たな技術・技法の開発、課題解決に必要な物品の調達など、「生きる力」の育成に通じる行為には時間的な幅が必要とされるのである。

オンラインにより、講義の意義や学びの方向性、当該授業時における作業の内容と具体的な手順、課題の提出方法と活動の振り返りについて、教示資料を丁寧に作成して受講生に配信する。学修の流れをつくるた

めに、一定の受講期間を設定して定期的に課題を提出させる。一斉型の対面授業時における机間指導にかわるものとして、電子メールを使い受講生からの問い合わせや質問等に随時対応できるようにする。加えて、前述した受講生個々に対して基本的な材料と用具類の送付ができれば、学修効果の高い材料提供型の授業を実施することができる。本学には、独自の学修支援システムBlackboard@tamagawaがあり、学生にも広く浸透している。そこで、「図工（幼）」の受講生41名に対して毎回の講義資料と課題を当該システムにより配信し、課題を翌授業日の前日17:00までに授業担当者宛に電子メールで提出させることを基本とし、その確認をもって出席にカウントするという授業の運営とした。

4. 授業運営に対する準備作業

造形制作を伴う授業は、担当者が取り扱う教材の内容はもとより、使用する材料と用具類、教室の設備や備品の状態とその広さ、さらに受講者数の把握も含めて、準備に臨むことが求められる。報告する「図工(幼)」は、保育者養成に関係する授業であることに加えて遠隔で実施をするために、造形制作を行う授業としてだけでなく、特別に留意した事項が幾つかある。

4.1 遠隔授業のための教材づくり

最初に行ったことは、授業で取扱う材料と用具類を受講生に届けるための下準備である。遠隔授業の場合は受講生に対して授業で扱う必要最低限の品々を教材として送り届けなければならない。送付の作業は、事務部からの支援を受けて行えたが、封入および送付する物件の下準備については、授業担当者が担うことになる。まず行ったのは、15回の授業で扱う物品の分量と出荷件数の見積りを立てて、教材の送付方法を選定することであった。シラバス作成時に、15回の授業を通して受講生が準備するものと科目担当者側で用意するもの見当はつけているので、材料の大きな分量は把握ができていた。また、履修登録期間内の登録者数を確認し、今期の受講者数を最大で50名と予測し、送付方法の検討を行った。数量的に少なくはなく、他の科目でも教材を送付する可能性があるために、送料は極力抑える必要がある。これらのことを考慮し、全国一律の料金で縦34cm×横24cm×厚さ3cm(重さ4kg)まで送れるレターパック郵便を使用することにした。

送付の方法が決まると、次はその条件に適うように材料等を見直し、手を加える作業である。つまり、15回の授業に対応した「図工（幼）」用の教材キットを50名分つくる作業が授業の準備に加わるのである。留意点は、総分量が規定の封筒内に収まるようにまとめることと、使用目的や材料としての性質が類似しているものは、異なる題材でも共用ができるようにすることである。材料等の大きさを調整し、形状や大きさによって分類して小分け袋にまとめるようにした。また、授業回数ごとに物品が異なることから、受講者が取り違えることがないように、小分けにした袋それぞれに使用する授業回数と品名を明示した。加えて予備の材料も同梱した（写真1、2参照）。

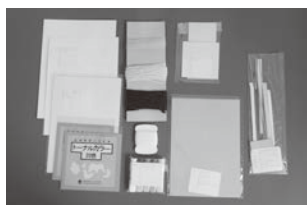


写真1 送付用教材

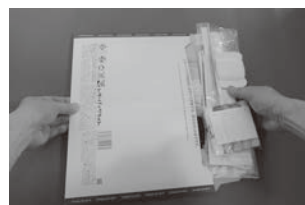


写真2 教材封入

4.2 教材発送のための準備

教材づくりが授業準備のハード部分とするならば、発送準備はソフトの作業に相当する。学生が遠隔授業をどこで受講するのか、授業担当者は送付する宛先を確認し発送に向けての準備を行うことになる。学籍情報から学生の住所と保証人住所は確認できるが、どちらで受講を希望するのか不明である。教材を確実に届けるため、受講希望者個々の意向を確認する必要があった。Blackboard@tamagawaは、登録済みの学生全ての電子メールアドレスに向けて、一斉にメッセージを配信することが可能である。そこで、①保証人住所②学生住所のいずれか一方を教材の送付希望先として選択し、期日までに科目担当者宛に通知する旨のアナウンスを行った。教務日程の都合と、反応の芳しくない学生がいたことで、初回の授業までに全員に対して教材を届けることができなかつたので、以降に遠隔授業の可能性が高い造形関連の授業を担当する際には、このことを想定した授業のカリキュラムをあらかじめ考えておく必要性を強く感じた。

5. 授業実践

遠隔により「図工（幼）」の授業を展開していく上で留意したことは、送付する教材の扱いと授業内容に対する動機付けおよびその継続についてである。造形実技を主体とする授業では、使用する材料や用具類が学修活動の動機付けに大きく影響する。一斉型の対面授業では、教示する際の説明や活動時のフォローなどが臨機にできるため、教室という物理的な共有空間がそれらを扱う上で有効に機能していたが、遠隔授業では学びの環境が受講者の自室となることから、手にする教材が動機付けにより強く影響を与えるようになる。

今回は、前述の通りレターパックを使用しての送付となり、封入する荷の分量をコンパクトにまとめると同時に、種類や大きさ、用途ごとの細かな仕分けと表示を行った。封入物の扱いが分かり難いと、授業に対する意欲が削がれるからである。加えて、別途に封入物の一覧表と説明を添えて授業時に不都合が生じないように配慮した（資料1参照）。

また、配信する講義資料は視覚的な教示資料を充実させ、制作の手順や要点を確実に把握できるようにし、受講生の不安を取り除くことと、提出された毎回の振り返りに対して必ずコメントを添えて返答するようにし、学修に対する意欲が継続するように配慮した。これらのことを踏まえた15回－10題材の授業実践を以下において説明する。

5.1 見立て活動（第1回－第2回授業）

(1) 教材観：幼児期における見立て活動は、想像力を育む上でもまた後の知的な学びの基礎をつくるという視点からも重要である。保育者には子どもの心に寄り添い共感できるような感受性と柔軟な発想力が求められる。これからの授業に対する準備運動的な意味も含めて、色紙を使った見立ての活動を2回に分けて体験する。

(2) 活動について：四角形の色画用紙に無作為にハサミで3ヶ所切り込みを入れ、さらに3回折り込んで偶然出来上がった形を見立て、イメージどおりの装飾を施す。初回は片面での見立て、2回目は難易度の高い両面からの見立てを行う。

(3) 材料と用具について：①送付物 ・色画用紙（10cm×10cm）×5枚 ・色画用紙（16cm×7.5cm）×5枚 ・色紙セット（15cm×15cm 20色）×1セット ②各自で用意 ・ハサミ ・糊 ・糊下紙 ・筆記用具

(4) 教示用資料数： ・プリント類7 ・写真55

(5) その他の事項：遠隔による実施ということで、授業に不安を感じる者もあり、造形物としての完成度を求めるよりも感性の準備運動として活動を楽しむようにさせる。

5.2 飛行玩具（第3回－第4回授業）

(1) 教材観：「飛ぶ」「飛ばす」という現象や行為には、広く人間の興味や関心を引き寄せる魅力性がある。そこで、折る・丸める・貼るなどの行為を伴う飛行玩具を制作し、幼児の手指の巧緻性育成に繋げる造形活動のあり方を考えていく。

(2) 活動について：リング翼と呼ばれる飛行玩具制作を2回に分けて実施する。初めは、基本的な作り方と飛ばし方を理解して、次に紙質・厚み・大きさ・縦横の比率など異なる材料の対応と造形表現の可能性を実験する。2回目の授業では、前回の教材研究で得た知識を基に、造形表現としてのリング翼を創作する。

(3) 材料と用具について：①送付物 ・上質紙 (B5)×10 ・画用紙、色画用紙等 (B5)×5 (任意に選択) ・色紙セット (15cm×15cm 20色)×1セット ②各自で用意 ・ハサミ ・カッターナイフ ・カッティングマット ・セロハンテープ ・糊 ・糊下紙 ・描画着彩用具等 ・筆記用具

(4) 教示用資料数：・プリント類4 ・写真43 ・動画1

(5) その他の事項：造形表現として考えた場合には、「面白く飛ぶ」という視点も大切となる。

5.3 屋外運動遊びと造形（第5回授業）

(1) 教材観：子どもの外遊びの衰退が指摘されており、保育の現場で意図的に子どもの外遊びを考えていく必要がある。今回は、構造が単純で携行性に優れ飛行性能の高い凧づくりの経験をし、その魅力と造形活動の意義について考察する。

(2) 活動について：グニャグニャ凧は、構造はシンプルだが工程の全てを幼児に行わせるのは難しく、制作体験を通して保育者の支援箇所と子どもが関われる部分を把握し、保育活動のコーディネートができるようにしたい。

(3) 材料と用具について：①送付物 ・竹ひご (φ1.8mm×長30cm 4本 (予備2本含む)) ・ビニールパッチ (8コ (予備4コ含む)) ・縫い糸 (20/3)×1巻 (8、10回目と共用) ・上質紙 (B5)×1 (糸巻き用) ②各自で用意 ・ポリ袋orポリシート (サイズ30cm×40cmがとれる大きさ ★薄手のもの) ・ボールペン (凧の形取り用) ・油性カラーマーカー (描画着彩用) ・直定規 (30cm) ・穴あけの用具 (先の尖ったもの)

(4) 教示用資料数：・プリント類8 ・写真27 ・動画1

(5) その他の事項：幼児は、飛ぶものに夢や憧れを抱くので、描画には想いが投影できるように導く。

5.4 偶然性と造形（第6回授業）

(1) 教材観：幼児期の造形活動に対して、偶然の色や形との出会いを楽しめるように、技法特性と絵の具の扱いについて学修する。

(2) 活動について：「吹き絵」や「ドリッピング」と呼ばれる偶然性の高い技法について、その効果を引き出すために絵の具の置き方・吹き方・用紙の色との相性など表現における要領を体得する。

(3) 材料と用具について：①送付物 ・画用紙、色画用紙 (B5) 等×5 (任意に選択) ・水彩絵の具 (5色 白、黒、赤、青、黄) (9回目と共用) ・筆×1 (9回目と共用) ・ストロー×1 ②各自で用意 ・パレット、溶き皿等 ・筆洗

(4) 教示用資料数：・プリント類2 ・写真30 ・動画1

(5) その他の事項：活動に際しては、場の雰囲気づくりと環境設定がとくに重要となる。

5.5 環境教育と造形（第7回授業）

(1) 教材観：身近な自然に親しむ造形的な活動を通して、幼児期における環境教育のあり方を考える。

(2) 活動について：B5判程度の箱を用意し、近隣から集めた自然材料で壁飾りをつくる。自然材料の魅力を引き出すために、色紙・毛糸・ボタンなどを添えてもかまわない。

(3) 材料と用具について：①各自で用意 ・自然材料（木、枝、葉、実、穂、石、貝がら、珊瑚、流木…など ★自分で見つけたものに限る） ・空き箱（サイズB5程度（紙や木） ★送付した厚紙（27.5cm×20cm）などで自作しても可） ・補助材料等（色紙、色画用紙、描画着彩用具、接着剤、その他を必要に応じて用意する） ・ハサミ ・カッターナイフ ・カッティングマット ・セロハンテープ ・糊 ・糊下紙 ・木工用接着剤

(4) 教示用資料数： ・プリント類1 ・写真20

(5) その他の事項：保育者が事前に現地へと赴いて、自然物の状態と安全確認をしておくことは必須である。

5.6 手技遊びと造形（第8回授業）

(1) 教材観：指先の巧緻性を育むためには、単純な行為を繰り返して体で修得することが肝心である。そのため、行為の結果が目に見えて実感できることが大切である。

(2) 活動について：支柱となる割り箸に毛糸を巻きつけていく行為を繰り返していく。技法的には単純であるが、巻きつけ方や材料に工夫を加えると、造形表現としての可能性が見えてくる。

(3) 材料と用具について：①送付物 ・割り箸×2膳（・風（5回目）の残りがあれば竹ひごも使用可） ・毛糸（練習用3色） ・縫い糸（20/3）×1巻（5、10回目と共用） ②各自で用意 ・作品制作用材料：毛糸、紐、糸など（巻きつけることのできるもの） ・補助材料：ビーズ、ボタン、モール、接着剤など、必要に応じて用意する ・ハサミ ・カッターナイフ ・カッティングマット

(4) 教示用資料数： ・プリント類3 ・写真40 ・動画2

(5) その他の事項：子どもの心身の発達状況を踏まえて、巻きつける材料の太さや材質を考慮する。

5.7 無意識からの造形（第9回授業）

(1) 教材観：幼児期は、無意識から物事の関係性を意識する意図的・意識的な行為への移行時期である。子どもの積極性を引き出すために、「予想外の期待感」を与える術を身に付けてもらいたい。

(2) 活動について：二つ折りにした画用紙の上に絵の具をたらし、合わせて転写させることで現れる模様を楽しむ技法である。現れる形や色を効果的に演出する造形的な手法を工夫する。

(3) 材料と用具について：①送付物 ・画用紙、色画用紙（B5）等×7（任意に選択） ・水彩絵の具（5色 白、黒、赤、青、黄）（6回目と共用） ・筆×1（6回目と共用） ②各自で用意 ・パレット、溶き皿等 ・筆洗

(4) 教示用資料数： ・プリント類2 ・写真31 ・動画2

(5) その他の事項：絵の具が乾くと転写ができないので、手早く合わせる事が大切である。

5.8 活動の発展について（第10回授業）

(1) 教材観：一つの事柄を基にして、活動を発展させていくことも造形表現活動の楽しみ方である。前回の合わせ絵から動く蝶々の工作へと活動を発展させていく。

(2) 活動について：示した手順に従って、動く蝶々の工作をつくる。今回は蝶々の物語を考えて、それを工作で表現する。

(3) 材料と用具について：①送付物 ・縫い糸（20/3）×1巻（5、8回目と共用） ・ストロー×1 ・厚紙片（片面白ボール紙 6cm×8cm）×1 ②各自で用意 ・合わせ絵の作品（前回（第9回）未提出のものを使用する） ・装飾用材料：色画用紙、色紙、描画着彩用具などを必要に応じて用意する ・ハサミ ・カッターナイフ ・カッティングマット ・セロハンテープ ・糊 ・糊下紙 ・直定規（30cm） ・筆記具等

(4) 教示用資料数： ・プリント類3 ・写真28 ・動画3

(5) その他の事項：作業の内容を理解させることも工作活動の教育性である。

5.9 材料研究・紙（第11回－第12回－第13回授業）

(1) 教材観：「動物」をテーマとした立体的作品を紙でつくることにより、その扱い方と表現に対する柔軟な思考を身につける。

(2) 活動について：今回は3回の授業時間をかけて、表現の方向性を自分で考え、紙の扱いに工夫を凝らしながらじっくりと創作活動に取り組むようにする。

(3) 材料と用具について：※材料は、各自が必要に応じて調達をする ・作品制作用紙：画用紙、色画用紙、ケント紙など（★サイズや枚数は、各自が必要に応じて用意する） ・装飾用品等：色紙、描画着彩用具など必要に応じて用意する ・補助材料：毛糸、紐、ビーズ、ボタン、モール、割り箸、竹ひご、接着剤、その他を必要に応じて用意する（★ただし、主材料は紙であること） ・ハサミ ・カッターナイフ ・カッティングマット ・セロハンテープ ・糊 ・糊下紙 ・筆記具等

(4) 教示用資料数：・プリント類8 ・写真33

(5) その他の事項：表現の主題を明確にするために、作品には必ずタイトルをつけるようにする。

5.10 版表現（第14回－第15回授業）

(1) 教材観：幼児にも扱い易い紙版画の技法と、色鮮やかなこすり出しの技法を合わせて、造形活動における版表現の可能性を学修する。

(2) 活動について：初めの時間に、画用紙による版づくりとこすり出しの技法研究を行い、次の時間で造形表現として作品にまとめ上げる。

(3) 材料と用具について：①送付物 ・画用紙（32切判 19cm×13.5cm）×1（版づくり用） ・上質紙（B5×5 こすり出し用） ・画用紙（16切判 27cm×19cm）×1（貼り付け用台紙） ②各自で用意 ・色鉛筆（用意できない場合には、鉛筆で行う） ・ハサミ ・カッターナイフ ・カッティングマット ・糊 ・糊下紙 ・筆記具等

(4) 教示用資料数：・プリント類5 ・写真28

(5) その他の事項：今回はインクを使った印刷は行わない。構成遊び的な要素の強い活動である。

6. アンケート調査

実施した授業ごとに、受講生から提出された振り返りシートの記述を確認していたが、題材の内容や授業運営、授業担当者の対応に対して、大きな不満を持っているようには感じられなかった。しかし、それはあくまでも授業を行った側からの主観でしかないために、当該授業に対して学生がどのような受け止め方をしているのかを確認するために、2021年1月18日から2月12日にかけて、授業の改善に結びつけることを目的とし、本学の学生ポータルサイト（UNITAMA）使って実施された教育学部の授業評価アンケートにおける集計結果をみてみたい（資料2参照）。

回答率	：	図工（幼）	受講生数	41名	解答者数	30名	73.1%
		（学部全体	在籍者数	1635名	解答者数	796名	48.7%

このアンケートの結果からは、授業に対する学生の意欲や授業内容の理解度が高く、担当教員の授業運営に対しても比較的良いとらえ方をしているようである。また、遠隔による授業であったために回答者の2/3が授業において孤立感を抱いていたことが分かる。

資料1 図工(幼):遠隔授業用 送付物等 一覧

★送付物以外に必要な材料や用具類は各自で用意してください。

授業回数	テーマ	内容(提出物)	色画用紙(カット)・10cm×10cm・16cm×7.5cm	色紙セット(トータルカラー20色セット15cm×15cm)	上質紙(B5)	色画用紙(B5)任意の色	画用紙(16切判 27cm×19cm)、(32切判 19cm×13.5cm)	竹ひご(直径1.8mm×長30cm)	縫い糸(20/3)	ビニールパッチ(◎)	水彩絵の具(単色5本)・白・黒・赤・青・黄	筆(1本)	ストロー	毛糸(3色)任意の色(厚紙に巻いたもの)	割り箸(2膳)	厚紙(片面白ボール紙)・大×1枚・小×1枚	(説明用のプリント類)	
1	見立て活動(1)	形さがし(片面2作品)	各5枚ずつ	1セット														
2	見立て活動(2)	形さがし(両面1作品)																
3	飛行玩具(1)	UFO(教材研究・試作)			10枚												○	
4	飛行玩具(2)	UFO(本制作1作品)		1セット		5枚(色の選択は任意)												
5	屋外運動遊びと造形	凧づくり(1作品)			1枚			4本(予備2本含む)	1巻(8、11回目と共用)	8つ(予備4つ含む)							○	
6	偶然性と造形	吹き絵(2作品)				5枚(色の選択は任意)					5色(9回目と共用)	1本(9回目と共用)	1本					
7	環境教育と造形	自然のものでつくる壁飾り(1作品)														大1枚(27.5cm×20cm)		
8	手技遊びと造形	毛糸工作(1作品)							1巻(5、10回目と共用)					3色(任意の色)	2膳		○	
9	無意識からの造形	合わせ絵(2作品)				7枚(色の選択は任意)					5色(6回目と共用)	1本(6回目と共用)						
10	活動の発展について	合わせ絵を使った工作(1作品)							1巻(5、8回目と共用)				1本			小1枚(6cm×8cm)	○	
11	材料研究-紙(1)	紙でつくる動物(1作品)	《材料の用紙等は必要な種類と量を各自で考えて用意をしてください》															
12	材料研究-紙(2)		《材料の用紙等は必要な種類と量を各自で考えて用意をしてください》															
13	材料研究-紙(3)		《材料の用紙等は必要な種類と量を各自で考えて用意をしてください》															
14	版表現(1)	「きりとり紙版画」によるフリッタージュ(1作品)		5枚													○	
15	版表現(2)						16切判1枚、32切判1枚											
			封入数	各5枚ずつ	2セット	16枚	17枚	16切判×1枚 32切判×1枚	4本	1巻	8つ	5色	1本	2本	3色	2膳	大1枚、小5種 1枚	



写真3 見立て活動1



写真4 見立て活動2



写真5 飛行玩具



写真6 屋外運動遊びと造形

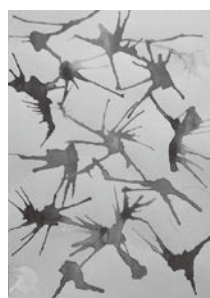


写真7 偶然性と造形



写真8 環境教育と造形

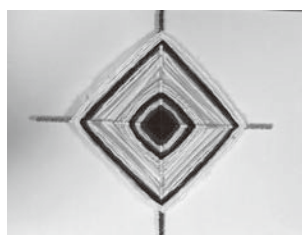


写真9 手技遊びと造形

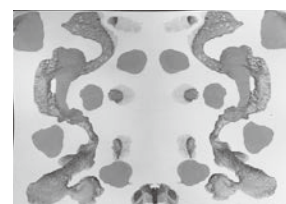


写真10 無意識からの造形



写真11 活動の発展について

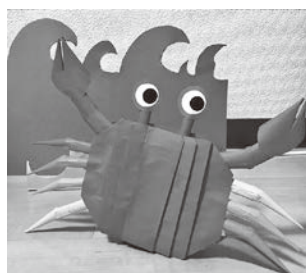


写真12 材料研究・紙



写真13 版表現

資料2 2020年度 秋学期 図工(幼) 授業評価アンケート 【教育学部】

学生の意欲や理解に関する設問		比率	人数
1. 授業外学修授業 1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	4時間以上	3%	1人
	3時間~4時間未満	23%	7人
	2時間~3時間未満	47%	14人
	1時間~2時間未満	20%	6人
	1時間未満	7%	2人
2. シラバス 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	とてもそう思う	30%	9人
	そう思う	53%	16人
	どちらでもない	7%	2人
	そう思わない	3%	1人
	全くそう思わない	7%	2人
3. 意欲 授業に意欲的に取り組みましたか	とてもそう思う	77%	23人
	そう思う	23%	7人
	どちらでもない	0%	0人
	そう思わない	0%	0人
	全くそう思わない	0%	0人
4. 興味 授業の内容に興味は持てましたか	とてもそう思う	67%	20人
	そう思う	33%	10人
	どちらでもない	0%	0人
	そう思わない	0%	0人
	全くそう思わない	0%	0人
5. 理解 授業の内容を十分に理解できましたか	とてもそう思う	67%	9人
	そう思う	33%	16人
	どちらでもない	0%	0人
	そう思わない	0%	0人
	全くそう思わない	0%	0人
6. 目標達成 授業に示されている到達目標が達成できたと思いますか	とてもそう思う	50%	15人
	そう思う	47%	14人
	どちらでもない	0%	0人
	そう思わない	0%	0人
	全くそう思わない	3%	1人
7. 学力 総合的にみてこの授業で学力が伸びましたか *各授業の学力は(授業を通して修得できる力)シラバスに記載	とてもそう思う	57%	17人
	そう思う	43%	13人
	どちらでもない	0%	0人
	そう思わない	0%	0人
	全くそう思わない	0%	0人

遠隔授業に関する設問		比率	人数
16. ZOOMやTeamsなどオンラインで授業を受けた	毎回の授業	7%	2人
	半分以上の授業	0%	0人
	半分以下の授業	0%	0人
	数回のみ	0%	0人
	全くない	93%	28人
17. 先生が事前に撮った授業のビデオ動画や音声付パワーポイントを配信(またはBBなどにアップロード)したもので学んだ	毎回の授業	27%	8人
	半分以上の授業	10%	3人
	半分以下の授業	7%	2人
	数回のみ	10%	3人
	全くない	47%	14人
18. BBやUNITAMAに掲載されたりメール配信された授業のレジュメ(音声なしパワーポイントを含む)や教科書で学んだ	毎回の授業	83%	25人
	半分以上の授業	3%	1人
	半分以下の授業	0%	0人
	数回のみ	0%	0人
	全くない	13%	4人
19. 課題が出されそれぞれについて各自で学んだ	毎回の授業	97%	29人
	半分以上の授業	3%	1人
	半分以下の授業	0%	0人
	数回のみ	0%	0人
	全くない	0%	0人
20. ZOOMやTeamsなどのオンライン授業の中でディスカッションした	毎回の授業	0%	0人
	半分以上の授業	0%	0人
	半分以下の授業	0%	0人
	数回のみ	0%	0人
	全くない	100%	30人
21. 授業を受けても直接他の学生と会えないので孤立を感じた	とてもそう思う	30%	9人
	そう思う	30%	9人
	どちらでもない	13%	4人
	そう思わない	3%	1人
	全くそう思わない	23%	7人

教員の授業の進め方に関する設問		比率	人数
8. 説明 話し方や説明は分かりやすかったですか	とてもそう思う	33%	10人
	そう思う	37%	11人
	どちらでもない	23%	7人
	そう思わない	7%	2人
	全くそう思わない	0%	0人
9. 視覚 板書やパワーポイントは見やすかったですか	とてもそう思う	30%	9人
	そう思う	53%	16人
	どちらでもない	10%	3人
	そう思わない	3%	1人
	全くそう思わない	3%	1人
10. 教材 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	とてもそう思う	50%	15人
	そう思う	30%	9人
	どちらでもない	17%	5人
	そう思わない	3%	1人
	全くそう思わない	0%	0人
11. 授業計画 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	とてもそう思う	43%	13人
	そう思う	47%	14人
	どちらでもない	10%	3人
	そう思わない	0%	0人
	全くそう思わない	0%	0人
12. 時間 授業時間は有効に使っていましたか	とてもそう思う	50%	15人
	そう思う	30%	9人
	どちらでもない	13%	4人
	そう思わない	3%	1人
	全くそう思わない	3%	1人
13. 質問応答 質問に適切に対応してくれましたか	とてもそう思う	53%	16人
	そう思う	37%	11人
	どちらでもない	10%	3人
	そう思わない	0%	0人
	全くそう思わない	0%	0人
14. 環境 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	とてもそう思う	37%	11人
	そう思う	37%	11人
	どちらでもない	23%	7人
	そう思わない	3%	1人
	全くそう思わない	0%	0人
15. 熱意 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	とてもそう思う	57%	17人
	そう思う	40%	12人
	どちらでもない	3%	1人
	そう思わない	0%	0人
	全くそう思わない	0%	0人

今学期のような対面授業でない遠隔授業で良かったことや悪かったことなど感じたことがあれば書いてください。(100字以内)

- ・ ZOOMやTeamsでの授業でなかったため、少し孤独を感じましたが、毎回作品に対するコメントをくださったため、良かったです。
- ・ 作品を作って友達と共有することができればもっといい授業だと感じました。
- ・ 工作などはわからないこともあるので、友達と一緒に学びたい気持ちもあった。
- ・ 自宅でも取り組めたので良かったと思う。
- ・ 課題配信型の授業だったため、自主的に取り組む姿勢が身につきました。

7. おわりに

制作活動を行うために使用する教室や実習室は、言うなれば物理的な実体をもった空間であり、確かに授業を運営する上で材料や用具という実材を扱う拠り所となる。しかし、授業を成り立たせているものは必ずしも空間という物理的な要素だけではなく、むしろ授業者と受講者のつながりによって成り立つ「場」との捉え方に近いように感じられる。我々は、日常において物事が進行していく様子の事を「場面」という言葉で表現している。教室について、物理的な空間という捉え方を強いてしまうと、遠隔授業は脱教室ということになるが、「教育という行為が進行していく場面」を教室としてとらえることによって、授業の様々な可能性が見えるように思えてくる。造形制作活動を教室という物理的空間において、対面形式で行うことの教育的な効果は疑いようのないことだが、遠隔授業における学び方も一つの教室と言えるのではないだろうか。

今回のコロナ禍は、社会や生活における物理的空間の乖離を招いたが、オンラインの技術と配送システムにより離された空間と時間が再構築されて、新たな学びの「場」としての教室のかたちが示されたようにも思える。教材提供型の遠隔授業として実施した今学期の「図工（幼）」を支えたのが、個々の学生に配信され届けられた教材であり、それによって営まれた活動が、彼らの学びに対する興味と関心に応え得るものであったことを、授業のアンケートから読み取ることができた。時間と空間を共有するという事は、視点を変えると時間と空間に拘束をされることでもある。今まで当たり前であった、授業者と受講者全員が時間と空間を共にする光景の中に、もしかしたら見落とされていた事柄があるのかも知れない。むしろ時間と空間の拘束を解き学生に学びの場を委ねた方が、良い学びに繋がるのかも知れない。教室という学びの場とは何か、それはこれからどのような変貌を遂げていくのか。今回、保育者養成のための造形関連科目における遠隔授業の実践を行って、そのことを強く感じている。

【参考文献】

- 石川 秀香「学校教育における美術・造形的な活動の教育性に対する考察」『玉川大学教育学部紀要 第17号』2017年、pp. 1-22
- 岩瀬満佐江「風と遊ぶ」『教育美術 第633号』教育美術振興会、1995年、pp. 44-47
- 石賀直之「コロナショック以降のオンライン化授業にみる、ひと、もの、デジタルの関係」『教育美術 第939号』教育美術振興会、2020年、pp. 16-19
- 大橋 功『美術教育概論（改訂版）』日本文教出版、2016年、pp. 86-91
- 小塚新一朗『図解 造形美術の事典』東陽出版、1998年、pp. 289-290. p. 291、p. 297
- 佐藤 修「ZOOMを利用したオンライン授業の実践と課題」『玉川大学教師教育リサーチセンター年報 第10号』、2019年、pp. 85-94
- 菅原道彦『手づくりおもちゃ大図鑑』大月書店、1995年、p. 22
- 鳥居昭美、鳥居淑子『子どもの版画遊び—その理論・実技・指導方法』あゆみ出版、1995年、pp. 64-71
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説図画工作編』日本文教出版、2018年
- 文部科学省『幼稚園教育要領』フレーベル館、2018年
- 玉川大学UNITAMA 2020年度 秋学期 学生授業アンケート「図工（幼）」